



出張の季節

私のように大学に雇われている者の研究サイクルには授業が強く影響を与えています。授業以外にも研究室の学生に対する研究の指導やゼミがあり、実際にはこれらに多くの時間を使ってはいるのですが、授業以外だと比較的時間に融通が利きます。極論、休日や夜中に指導をすることもできますから。ところが、授業はそういうわけにはいきません。ですから、授業が自分の研究活動に対する非常に大きな制約となってきます。出張をしたくても、授業がある間は、1日か2日の短期出張、それも多くは土日の出張に限られてきてしまうのです。スイスで実験をしている私が現地に行くことなんてほぼ不可能となります。

逆に授業のない時、私たちの大学ですと8月中旬から9月末まで、あるいは2月中旬から3月末までが、出張の季節となります。実際、来週はストックホルム、そして再来週はCERNというように出張が続きます。数えてみると今わかっているだけでも9月は17日間、10月は14日間(私の授業担当は10月末からのため10月も前半は出張可能)の出張予定が入っています。

色々な所に行けますから、これが仕事でなければ楽しいのかもしれませんが、どこへ行っても実験をするか研究関連の打ち合わせをするだけですので、どこかへ行ったという喜びはあまりありません。むしろ、海外出張が続くと時差ボケの調整が大変で、研究というモチベーションがなければ出張はあまりしたくありません。しかし、恐ろしいことに、ATLAS日本グループ代表の一人は昨年CERN出張だけで20回以上したそうです。そういう忙しい人ですから、他の出張も多くあるはずで、その人から見たら私の出張回数なんてたいしたことないのでしょうか、それでも長時間の移動と休日の欠落(ヨーロッパ出張ですと土日を移動日にして平日は働けるようにします)は結構体に堪えます。

そんなわけで、弱音を吐きつつ来週はストックホルムなのですが、猛暑の日本を数日間とはいえ離れることができるのは少し嬉しいかもしれません。8月末の気温は15℃から20℃くらいだそうです。2週間以上猛暑日が続く大阪とはとんでもない違いですね。



著者紹介 花垣 和則(はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科 准教授

CERNでLHC実験に参加